

一声社: TEL03-6676-2179/FAX03-6326-8150

閑話休題—恐怖の赤福餅

ご近所シリーズ②. 思い起こせば、噛んだ犬もご近所なら、この方もご近所だった。

ヨネやんまだ 20 代、その方は既に相当のお年だった。かなり古い家に一人住まい。何かのきっかけで知り合いになり、家に呼ばれる事が増え、その度にお菓子を下さる。

「ああ、アンタさん。よう来てくれたなあ。私が皇后様（昭和天皇の）と親しいのは、もうお話ししたかな？ おひーさま・おもうーさまと呼び合う仲なの。私が女学校に行っていた頃ね…」

一庶民のヨネやんは「どこまでホンマなんやろ？」とちらちら思いつつ、その方の既に 5~6 回目のお話をじっと聞いていた。

「そうそう、今日はね。あなたに食べてもらおうと思って、いいものを取っておいたの」—そう言ってその方が戸棚から出てきたのは、赤福餅。まだ手付かず。

「アンタさん、若いんだから、たんと（たくさん）召し上がりなさい」

「ありがとうございます！いただきます！」。そう言って、2 ついただく。「美味しかったです。ありがとう……」「ちょっと。2 個しか食べてないじゃないの。もっと食べなさい」

「はいっ！ありがとうございます。では！」。

赤福餅は 1 つ 1 つがそれほど大きな餅ではない。そうは言うても、大の甘党でもなければ、大食漢でもない。いや、明らかに小食のヨネやんである。（もう十分なんやけど、おばあちゃんの好意を無にしたらアカンし……）。思い切ってさらに 2 個食べる。「ありがとうございます！ 美味しかったです

す！」「若いのに、遠慮なんかするもんじゃないよ。さあさあ！」

（いや～、もう 4 個も食うてるし。もう無理やで）「そら！食べて！」。（入るかな？）と思いつつ、「ありがとうございます。では！」と、さらに 2 個、無理矢理押し込む。

（もうアカン……）相当苦しいお腹を押さえつつ、「美味しかったですよ。ありがとうございます！」と急いで帰ろうとした時、おばあちゃんが言った。

「まだ半分残ってるよ」

結局あと 2 個赤福餅を食べて合計 8 個。残りの 4 個だけは泣きの訴えで何とか勘弁してもらい、口からやばいモノが出てきそうな気配を察しつつ、素早く帰ろうとしたまさにその時、おばあちゃんは言った。

「赤福に飽きたんなら、団子もあるよ」

戸棚から団子の箱を取り出してきた。もう、見るだけでえらい事になりそう。

「いえ、すみません。この後約束があるので……」—適当な事を言いつつ、足を玄関から外に出す。素早く振り返ろうとしたヨネやんに、おばあちゃんは追い打ちをかけた！ 「明日また来たらええよ。お団子取っておくからね」

絶対に行くもんか！ そう決心して避けていたヨネやんだが、3 日後に道でバッタリ出会ってしまった！

「ちょうどよかった。お団子があるから、寄りなさい」—蜘蛛の糸に絡んだ蝶のごとく、家に手繰り寄せられるヨネやん。「さあ、食べなさい」。団子の箱が赤福の時に見た物と同じだったことは言うまでもない。

「お団子ってこんなに硬くなるんやな」と 1 つ大切な勉強をしたヨネやん、20 代。青春の苦悩は深い。